

# 萱

2021・9

# 九月集

亀田虎童子

一塊の雲呼びとめて雨蛙  
夏負けや負けず嫌ひと言はれても  
一度来て二度来て揚羽来ずなりし  
空蟬を握りつぶせる殺意かな  
沢蟹を探しあぐねし石いくつ

消灯より天窓重し荒き梅雨 東京 武田 未有

日の名残包み白蓮閉ぢにけり  
片紐の美しき背や遠花火  
脚そろりそろりと小蛸船端へ  
彫り深き苔吹く墓誌や梅の雨

から梅雨やコロナワクチン受けに行く 東京 土田野里子

よき事も悪しきも梅雨に流さるる  
雨上り軒に蜘蛛の巣銀の玉  
ベランダの鉢の下より百足出づ  
朝顔の鉢植買ひてベランダに

火蛾のごと街のネオンの灯を恋ひぬ 千葉 中山 恵子

算数は苦手のままよ時計草  
咲けば散る木槿かなしみ落とすごと  
厨より娘の鼻歌やメロンの香  
肉球も鼻も桃色梅雨晴間

女梅雨爪切る音にリズムあり 東京 根來 隆元

梅雨晴れや一日旅も許されず  
白傘に内房総の浪ぞ散る  
深梅雨や土鳩は羽根を閉ぢしまま  
苗代にとどめおきたる雲の影

遺言も遺品もなくて蚯蚓の死 茨城 平佐 悦子

いい朝のいい茄子漬と白い飯  
赤子泣けばをろをろ泳ぐ金魚かな  
雨粒に形ありけり男梅雨  
レース編む平常心のまだ足らず

起き伏しの夏鶯や指栗 東京 ふかわりこ

夏の日やポニーテールの三塁手  
幽明やうつつあやしき額の花  
亡き兄の墓は新し迎へ梅雨  
哀別と悔み交々梅雨に入る

おぼろ夜のうすら笑ひのおそろしき 東京 松下 道臣

あーあー粗相の尿のあたたかし  
花筏水の細みの速かりし  
自転車の片足大地春惜しむ  
剣玉の世界一周昭和の日

あじさみや歌つて移動図書館来 千葉 光成 敏子

ラベンダー畑の夏蝶白の品  
青芝の今は球場三の丸  
印旛へと行けどもいけども栗の花  
不揃ひの枇杷こそよけれ弟の荷

荒梅雨や伊皿子坂を滝のごと  
断捨離の手がふと止まる砂日傘  
東京 谷田貝順子

土砂降りが止みたちまちの大き虹  
友とくぐる氷川神社の茅の輪かな  
夏至の昼静かに止まりぬ猫のいき

著莪の花敷石の濡れ光をり  
梅雨ごもり家事の分担恙なく  
東京 柳田 秀子

すれすれに塀の上なる梅雨の蝶  
七月や世に安泰のいつの日か  
父となる還暦の甥雲の峰

草笛にくちづさむ歌古き歌  
子供等のねがいの多し笹飾り  
東京 渡辺しづ子

梅雨深し行かねばならぬ所有り  
松虫草眺望千里美しヶ原  
母と二人素足を浸す山清水

梅干しも味噌も手作り姪より来  
目が合ふて手を振る幼梅雨の窓  
東京 飯塚トシ子

蓮の花お天気雨のつぶがとぶ  
会食なし白シャツ届く米寿かな  
半夏生マスクの中の半化粧

梅雨晴間リユックの中に花凶鑑  
何とまあきれいな夕陽梅雨晴間  
東京 加倉井たけ子

切り株の太きに病葉のひとつ  
やまももは故郷の木よ熟し落つ  
汗拭ひ川沿ひを行く万歩計

個々の花消して向日葵迷路かな  
那智の虹神の懸けたる首飾り  
東京 釜田 敬司

半夏雨テールライトのじむ街  
上水の水細くして桜桃忌  
氷川社の参道長し青時雨

琉金のゆつくりと寄り離れ合ふ  
蛇よりも長くなりけり蛇の衣  
東京 小島 良子

青梅の青き天地に紛れざる  
第三者のやうに寄り来し黄蝶かな  
陸亀の容となりぬ春の闇

青田風ハガキ二枚の近況報告  
銅葺き屋根かがやいて送り梅雨  
東京 菅原 朋子

境内に大木数多苔茂る  
親鳥の威嚇の声や一の宮  
小糠雨参道の翠重たげに

# 自習室 現代の俳句を読む

小島良子

コスモスの揺れて生駒の峽揺るる 塩川 雄三

「俳句界」六月号

この度の「関西俳句を辿る」という特集で、奈良県は茨木和生氏と塩川雄三氏が受け持たれている。

塩川氏は、奈良県と大阪との境、生駒山地の主峰生駒山の麓に移り住んで六十年過ぎられている。

青丹よし奈良は、古よりの歴史を沈める床しい地。

青丹よしとは、顔料の青丹の産出によるとの説もあるが、中国では青は天を、丹は地を指し、天と地の調和した吉祥の国という意ともいわれる。

掲句、コスモスの揺れに誘われるように、生駒の峽も揺れるとは、この峽の美しさ清らかさを十分に伝えている。

平群郡青田の青の充実す

雄三

この辺りは、古代の豪族平群氏の拠点で、竜田川も近く、金剛生駒紀泉国定公園に属する。力強い青田の青に、平群の地の豊かさや広がりを受け取れる。万葉学者犬養孝が歩き、写真家人江泰吉が歩き、文化史家小川光三の歩いた大和路を、俳句に詠みとらんと、氏もまた歩かれている。

生駒嶺を遠くに仰ぎ春灯

雄三

奈良を愛し、この地の旦夕を愉しまれているように思う。

いつかどこかの土筆となって生えておし 岸本 尚毅

「俳句」六月号

寓居の近くの江戸川の土手に、毎年土筆が出る。

家の者が積んできて食卓に載せてくれる。その度にまた春に逢えたと有難く嬉しい。

多年草の杉菜は根茎を横に長く伸ばし、季が来ると胞子茎の土筆を地上へ出し胞子を飛ばす。命は尽きることなく繋がる。人の思いも、見らぬ誰か、見知らぬ何かによってそと受け取って貰えるものかも知れない。

「いつ どこかで」ではなく、「いつかどこかの」という取りとめなさにも、慰められるように思う。

床の間に石置いてある日永かな 尚毅

蛇紋石、孔雀石、紀州青石なども美しいが、ごく普通のごろんとした自然石もいい。石には天地の光

や物音や、唯今に至るまでの長い時間が籠められている。床の間に悠久が置いてあるとは、なんと贅沢なことだろうか。

日は西に花の向こうを舟がゆく 尚毅

夕日に包まれて眼前に桜が咲いている。その向うの川をゆっくり舟が行く。「日は西に」の「西」がやんわりと響き浄福感も漂いはじめる。舟には人の魂が乗っているのか。

何気ない景のようでいて、このアングルには心惹かれる。